

再読 640 (平成 29 年 5 月 29 日) 氏名

今回は、小林正観さんの「ありがとうの奇跡」から紹介します。

1 年に何人か、次のような質問をする人がいます。

「私の『本当の使命』は何でしょうか。本当の自分探しを 20 年やっているのですが、まだ『本当の使命』が見つかりません」

「あなたは、今、何をやっているのですか」

「主婦です」「主婦なんですね。じゃあ、夫と子ども、まわりの家族に対してできることを、ただ淡々とやっていけばいいわけですね。まずは、目の前のことをやる。目の前のことをやらないと、神様は上から見ていて、『家庭のこともちゃんとやれないのだから、ほかのことは任せられないよね』と思っているのかもしれないよ」

パッと服を脱ぎ捨てて、突然、「スーパーマン」になることを夢見ている人が、世の中にはたくさんいます。でも、「今とは違う別のところに、すごい役割やすごい能力が隠されていることは」は、残念ながらありません。今、生きている「私」が、すでに「100 点満点」なのだから、「今、やらされていること」を普通に淡々とやって、淡々と死ぬのが、「人生をまっとうすること」だと私は思います。講演会が終わってから、私に、次のような質問をした方がいます。

「2 年前、有名な神社の境内を歩いていたら、白い光が私の体に入ってきました。パアッとすごい光に包まれたのですが、あれはいったいなんだったのでしょうか？」

私の答え。「単なる勘違いだと思います」

この人は、「あなたは、きっとすごい人なんだ。それはすごい現象だ」と私に言われたかったのでしょうか。けれど、私は「唯物論者（ゆいぶつろんじゃ・現象が「物質的」に現れない限り信じない）」です。本当に特別な力を持った光が体に入ったのだとしたら、すでに、私に聞く必要はなかったはずです。すごい人になったのなら「あれをやっても、これをやっても、何でもうまく行って、すでにひっぱりだこの状態になっている」と思います。「あれは何だったのでしょうか？」と聞きに来るといことは、現時点で、「何も起きていないから」であり、2 年間も何も起きていないといことは、「単なる勘違い」と考えるほかありません。「自分には、何かすごいことをやる使命があるはずだ」と思っている人ほど、「目の前の人・こと・もの」を大事にしていないのかもしれない。「頼まれたこと」を誠実にこなしている人に、「これをクリアしたので、次は別のことをやらせてみようかな…」と、神様だったら思うのではないのでしょうか。

小林正観さんは、「頼まれたことがあったら、それをできるだけ全部引き受ける」という。頼まれごととは、PTA や町内会、あるいは公的なボランティアのようなものから、会社や家庭の仕事も含まれる。今、目の前に与えられた仕事だ。ときには、自分の苦手なことも頼まれたりする。しかし意外に、自分の苦手なことや、不得意なことの中に、人生の転機のキッカケやチャンスになることがあったりする。だからこそ、「頼まれごと」は、文句を言わず、面白がって、淡々と引き受けることが必要だ。頼まれごとを何年にもわたって、淡々とやっていくと、自分の使命が見えてくる。どんな方向に動かされているのか、という神の意志のようなものをそこに感じるからだ。自分に与えられた目の前の仕事を、淡々と一所懸命にやっている人のところにしか、次のステップはやってこない。今の生き方がチャランボランな人に、次の飛躍につながる大きなチャンスなどはこないからだ。まずは、目の前に与えられた仕事を一所懸命に取り組みたい。

Q1: 人生の転機のキッカケやチャンスになることはどこにあると言っていますか？

A1: ()

Q2: 自分にいやな頼まれごとをされた時どの様にしていますか？

A2: ()